「人間の格」

河野　あつみ

この本は「人間になる為」「本物の人間になる為」の哲学を書いている。近代における学校教育は、科学的な思考能力と科学的な知識や技術を習得することに大半を費やしてきた。その結果理性能力が成長し、頭のよい人間はたくさんつくられたが、人間性が見失われ、血の通った温かな心が忘れられ、人格の崩壊といわれる実態に立ちいってしまった。

「人間の格」とは何であるかを明確に描いている教科書が全くない。人格とは何かを知らず、人間で在ることはどう在ることなのか、人間に成ることはどうなることなのかを論じることなく子供が育っているのが現状である。本来の人間であることを学ばずに成長してしまった間違った教育や社会がある今、様々な問題やニーズが後を引かない。人間であるべき姿、人格を学ぶことによって今の社会の

コクヨ　ケ-70　20×20

問題を解決、なくす一つの糧になると考える。一人一人の人格、考え方でこの社会は大きく変わる。いや変わらなくてはならないところまで迫ってきている。人間として生まれて、人間が完成していると大半の人が間違って思っている。せっかく人間として生命をいただいたのだから人間である意味、価値を十分に理解していくことが大事である。

著者の芳村思風。日本の哲学者。感性論哲学創始者である。感性論哲学とは新しい生命観、人間観を基礎に成り立っている。人間の目的は人間らしい人間に成ることであり、本物の人間を目指す上で、人間の能力の中で感じる力、「感性」という在存が持っている能力、原理というものを人生や人間の生き方において非常に大事だと考えている。「感性」が持っている基本原理は自己保存の欲求、種族保存の欲求から出てくる人間的な生き方の原理、すなわち人間は意志を実現し、愛を実現することであり、このニつを実現すること

を通して人間は初めて本当の意味での幸福が実現できると提唱している。

まず哲学とは何か。哲学と聞くと難しく感じ、本を読む気にもならない。哲学を辞書で調べると、人生、世界、物事の根源のあり方。原理を、理性によって求めようとする学問。また経験から作り上げた人生観。と出て来る。しかしこの本は違う。感性論哲学という言葉で「理性」ではなく「感性」で問いを求めている。哲学とは真理を追究していく学問と記している。真理とは、その文字の通り本当の事。間違いでない道理。人間にとって最高の価値は真理。自分にとって最高のものを目指していく。真実、真理どちらも真なるものを求めていることは共通しているがそこには理と実の違いがある。真なるものに理を与えるものは理性、真なるものに実を与えるものは感理という違いがあることが分かった。人間は理性によって本能を抑圧する。その行動からストレスやノイローゼ、ヒステリーなどが

コクヨ ケ-70 20×20

生じそこから精神的病的な現象が出てくる。そのことから、理性によって本能を抑圧するような自己分裂的な人間観、精神分裂的な人間観はおかしいのではないか。人間の本質は感性ではないか。そこで感性論哲学がみえてくる。

感性とは、感動したり怒ったり、疑問に思ったり自分の中に湧き上がってくる感情で「これは少しおかしい」や「納得できない」など疑問が湧き上がってくること。これが感性の実感。感性から湧き上がってくる実感。現実への問という感性の実感こそ、真実の自己との出会いである。感性は個性になりうる。現実への問い、疑問という感性の実感こそ使命との出会いになる。神仏が自分の才能、使命はそこにあると教えてくれている。しかし単に興味や疑問を持つだけでは感性論哲学の立場から言うとまだまだ保守的。興味を持つだけでは常識の範囲内の段階でそこから工夫をして自分なりにその問いを追究する。個性

コクヨ ケ-70 20×20

というのは、ただ何かが上手という領域とは違うもの。まだ自分には満足できないというものが出てこなかったら本物にはならない。何かに関心を持つことは個性の発見の原理であり本当の個性ではない。疑問、興味関心を追究、探求していく。日々自分で自分を教育していくことが大事。自分で自分を教育していくという人生態度は、個性を磨きだすのには一番大切なことで、それを一生続けなくてはならない大事な態度。このようなことを続けていると個性が少しづつ開眼してくる。感性は個性。それは常に磨き一生をかけて自分で自分を教育し続けていかなくてはならない。

理性とは、客観性と普遍性の能力で他はどうかなどと考える考え方を理性的に考えるという。自分の感情におぼれずに、筋道を立て物事を考え判断する能力。感性は本来個が持っている疑問や湧いて出てくる欲求、考え方。感動的刺激や印象を受け入れ反応する能力、感受性。人間が自然に湧き上がってくる

感情を抑圧するのではなく素直に受け入れ反応し考える感性。感性論哲学はより人間を目指すために必要なものは何かを追究した哲学であるといえる。

その中で人間になる為に必要な三つの条件が唱えられている。一つ目は「不完全性からの自覚から滲み出る謙虚さ」不完全性の自覚から滲み出てくる謙虚さほど大事なものはない。謙虚さを失えば人間的な価値を喪失してしまう。謙虚さを見失うと人間は人間であることをも失ってしまう。どうしたら謙虚さが滲み出て来るのか。その為には、常にある意味で自分自身を罪の意識の中に置くことが非常に大事である。人間は罪を犯すことによってはじめて人間になる。失敗をし罪を犯さなくてはならない。罪を犯してしまったという自覚から不完全性の証を意識し滲み出てくる。失敗を償わなくてはならないが本当に申し訳ないことをしたという気持ちがその人にあることを認識し、確認できれば最後は許されな

コクヨ ケ-70 20×20

ければならない。人間は皆不完全なのだから
それを責め立てるのではなく許しあう愛が必
要。責め合えば地獄。許しあって補って生き
ていかなくては社会は地獄になってしまう。
不完全であることを自覚し認識することで間
違った自信や理屈を糧に傲慢に振舞ってしま
う大きな損失を犯すことは減る。他人への傲
慢な態度こそ信頼を失いその人自身の価値を
下げる結果を巻き起こしてしまう。謙虚さと
いってもただ自分を卑屈するのではなく、不
完全なのだからそれを補おうと素直に人の意
見を聞き入れ、学ぶ姿勢が重要だと思う。傲
慢だと対立的感情が出てしまいせっかくの学
びの場を台無しにしてしまう。自分は不完全
なのだからそれを償う補うための謙虚さこそ
大切。生きていくために重要でその謙虚さを
持ってなければ成長も出来ない。

二つ目は「より以上を目指して生きる」不
完全性を持っていたからといって人間になる
ことはできない。完全なるものをイメージし

それを目指していく努力が必要である。不完全であるという認識があるからこそ完全系をイメージしそれを目指して努力する。今の自分より上を目指すこと。限りなく完璧に近づくこと。そこで満足するのは神のみ。そこで満足するのではなく、今より上、先をイメージしそれに近づくための努力をしなければ人間になることはできない。人間しかイメージに近づく努力はできない。努力をしている人間は魅力的である。輝きがある。より以上を目指すことは人間しかできない能力である。その為には意志の強さが必要。意志の強さとは欲求の強さ。「やらなくては」「やってはいけない」は理性的に作られたもの。命の中から湧き上がってくる欲求こそを自分に課して生きていくこと。そのことによって以上を目指していくことが大事。不完全であることから完全を目指し常に一日一日努力をし、より理想、完全を目指して努力し続けること。より以上を目指して生きることで生きる希望

コクヨ　ケ-70　20×20

やカが漲ってくる。

三つ目は「人の役に立つ存在になる」この
ことは決して忘れてはいけない人間になる為
の条件。人に評価されて初めて自分の価値に
気が付く。価値は人が評価してくれなければ
存在しない。人の役に立つ。自分の能カや行
動、言動によって周りの人の役に立てればそ
れが自分の価値につながる。自分が自分がと
自分の物差しでしか図らないとそれはあくま
でも自分の中で終わる。人から評価されるこ
とによってはじめて自分の存在価値が見いだ
されてくる。

この三つの条件を決して忘れてはならない
これを目的にして努カすることによって人間
は本物の人間の人間としての格を持つことが
できる。人間になる為の三つの条件はこの順
序も大事である。自信のある人しか謙虚さは
出てこない。人間としての誇りを持っている
謙虚である為には人間としての自信、本物の
強さが必要である。謙虚さが一番大切であり

コクヨ ケ-70 20×20

その先により以上を目指す、人の役に立つ存在になることが大切である。三つの条件を満たすことができれば人間が人間の格をもった本物の人間としての印を獲得したということができる。ですが人間は不完全なのでこの三つの条件を完璧に満たしてしまったといってしまったらその人は人で無しになってしまう。大事な事は、人間はこの三つの条件を自分の中に置きそれを実現しようと努力しているその姿の中に本物の人間があるのだということ。

常に理想を掲げてそれに向かって努力をしていくこと。

人格をさらに素晴らしいものに磨いていくには「三次元の構造をもつ人格」を目指していく。三次元とは高い人格、深い人格、度量心器の広い人格の三次元構造がある。人格には三次元の構造しかない。なぜか、それは人間が三次元の空間に住んでいるからである。人格の高さは、毎日問いを持ち生活し問い続けて自分の肥やしを増やしていくことで培っ

ていく。人格の深さは、問いの答えを求めながら経験、体験を増やし自分の経験値上げ磨いていく。度量、心、器の広さは、問い答えを具体的にもってそれを自覚的にもって日々の生活をしていく。素晴らしい人間性よりも素晴らしい人格をこの三次元構造を意識することで磨くことができる。人格の高さは、結果的に高い知識、高い技術、高い教養を持った人を示すことができる。人格の高さはその人が生まれてから今日までの獲得した知識、技術、教養の量に関係する。さらなる真実、美、善を問い続けてそこを追究していく。人格の深さは、知識、技術、教養の質。木でいえば根っこの部分で表面的には決して見えてこないところ。鍛られた魂、磨き上げられた心によって深さを感じることができる。深さは目に見えない内面を磨き上げる。人格の度量、心、器の広さは、許し愛することができること。その人を許す。接する。聞き入れる。高さ、深さの人格を持ち得たとしても傲慢さ

コクヨ ケ-70 20×20

や自分勝手な言動をしてしまってはお無しになってしまう。我慢することで自分の不完全性を見直し自分自身では考えつかないことを他人から教えていただく。心、器の大きさを広げていくことができる。

苦労から逃げない。苦労から逃げないという気持ちほど人間の重み深さを作っていくことができる。人生は苦労。苦労があってこそ磨かれる魂、心がある。人生はいつまで経っても修行。そうでなければ逆につまらない人生になってしまう。逃げたら自分の成長はそこで終わり、人間としても終わってしまう。人間はどうしても楽なほうへ、楽なほうへと行ってしまう。それは本物の人間ではない。本物の人間は常に問い、常に問いの答えを追究してこそ本物の人間としての人格を見つけていくことができる。しかし逃げてしまったらそこで終わり。苦労から逃げずに立ち向う。時間がかかってもー日一歩でもいいから前に進んでいくことが重要である。本質を見抜く眼

力を養う。何が本当で何が違うのか。苦労から逃げないこともまず大事だが問題を解決していくのに正しい答えを見つけていく本質を見抜く眼力を養うことが大事。何が本質か、苦労から逃げないことを続けていればこそ、本質を見抜く眼力を共に養うことができる。だからこそ、やはり苦労から逃げてはいけない。

自分のために相手を理解する。この世界は一人ではない。自分以外の人がいてこそ、自分を成長させることができる。自分一人であれば成長も何もない。外見だけの成長のみになり、内身のない人にしかならない。他人がいるから、自分と考えの異なる人がいるから苦労することもある。しかしその相手、環境から決して逃げてはいけない。自分と意見が違う。考え方が違うからといって、その人を遠ざけ、その人と対立してはいけない。違うからこそ面白い。その発想の転換を持ちたい相手の考えを私は理解したいという気持ちで

コクヨ ケ-70 20×20

相手に意見を求めたり、その考え方を学ばせてもらうことで、自分に今までなかった考える幅を広げられ、自分自身が成長できる。そして、自分は不完全なのだから教えていただいた事に素直に感謝をする。頭にくることも納得のできない事もたくさんあるかもしれない。しかし、そこに対立的感情をも、てはいけない。対立的感情は、人を不幸にする。何の生産性も持たず、お互いに傷つく。自分に腹を立てるのはまだ良いが人に腹を立てるのは違う。人間としての根底を見失っている。何かされても許す愛。愛こそ共存して生きているこの世界にはすごく大事である。相手も自分も愛することができれば、より高め合う世界になる。愛とは何か。他人を理解したいも、と知りたいという所から愛は生まれる。愛することで許せることもある。逆に厳しくなる事もできる。人間になり本物の人間こそ愛する人間になれる。自分に目を向け、自分が成長するために、相手がいる。都合の良い

考え方だがそう思えるようになるには、相当の努力が必要。努力を怠ってはは絶対にいけない。人格、格を持つ為、人間になる為の努力は常にしていかなくてはならない。相手がいる。その事に感謝できる心こそ磨き上げる重要な事。常に何事にも感謝をする。当り前なんて何一つない。当り前と思ってしまったら心は荒む。当り前と思っていた事にこそ、感謝ができたら一歩大きくなれる。感謝の気持ちを持ち他人を愛する事ができれば、どんなに幸せだろうか。

本当の人間になる為に、人間の格をもち、その格を磨き上げて生きていくことで、人間になる事ができる。

コクヨ ケ-70 20×20